

紹介する研究	泉恵美子・幡井理恵・田緑真弓 (2020). 「小学校英語 Can-Do 及びパフォーマンス評価実践における児童の変容」		
doi	2021 年度公開予定		
紹介者	中村香恵子 (北海道科学大学)	更新年月	2021.02

本論文は Can-Do 振り返りシートとループリックによるパフォーマンス評価を取り入れた実践を行い、その過程における児童の変容を考察することで、小学校英語教育における評価の在り方や課題を明らかにすることを目指したものです。実践を論文化する際、信頼性という観点から、読者が研究のプロセスをたどることのできる詳細で十分な記述が求められます。しかし紙面が限られていることから、実践の内容を記述するには、情報の取捨選択や工夫が必要となります。本論文は、2つの小学校での実践によるものであることから、ボリュームのある実践の内容をコンパクトに記述するための工夫が見られ、論文を執筆する上でも参考になるものであると思います。

本論文では、はじめに小学校外国語科における評価について、Can-Do 評価、パフォーマンス評価の意義や可能性、その活用の際の留意点等とともに解説されています。2つの小学校での実践はそれぞれ別のセクションで説明されていますが、両実践とも研究参加者である児童の特性や背景（これまでどのような学習活動をしてきて、どのような成果があり、そこから得られた課題は何か）を明らかにしています。その上で、それぞれ実践された授業の目的や流れ、その中でどのような評価のツールがどのように用いられたのかが丁寧に記述されています。

実践事例1（小学校A）では、「1対1で留学生に自分の一番好きな場所を紹介する」という目標のもとに5時間分の授業が実施されました。その際、児童の負担を軽減するため、伝えたい内容を整理する「マッピング」や語→句→文→文章へとまとめていく「穴あき例文」を用いた工夫も取り入れられました。児童はループリックを参考にしながら練習し、教師の支援もそれを児童に示すことによってなされました。結果は、児童による内省と教師によるループリック評価から得られた情報を児童の自由記述によって補完することにより考察され、児童が自身の力量を知り課題を見つけることによって形的评价として役立つことが報告されています。

実践事例2（小学校B）では、英語での共同発表による「自分の町紹介」のプレゼンテーションを行うという目標で、8時間の単元が設定されていました。児童は「自分の町にほしいもの」についてグループで話し合い、パフォーマンスループリックを共有しながらより良い発表を目指しました。Can-Doによる振り返りが、発表のイメージがつかめた時点、発表の直前と直後の計3回行われましたが、その際評価の内容には児童の実態によって修正が加えられました。児童による自己評価からは、自己調整学習の要素である学習方略に関する具体的記述が増え、自己効力感の高まりも見られたことが報告されています。

スタートしたばかりの小学校外国語科ですが、指導と評価の一体化を目指した評価方法の検討が求められています。本研究は、評価は児童の学習改善とともに教師の指導改善につなげるものであることを、改めて気づかせてくれるものです。

小学校英語教育学会・授業実践研究支援委員会では、論文執筆の助けとなるよう「実践研究をまとめるコツ」という動画を配信しています。ぜひご活用ください。